



# 一人ひとりの命が尊重される社会に

河野太通さん（上）

こうの たいつう／1930年、大分県にうまれる。龍門寺住職、臨済宗妙心寺派の管長。全日本仏教会会長、花園大学学長を歴任。著書に『禅力—あなたを変える禅の名言』（海電社）、『覚悟の決め方—僧侶が伝える15の智慧』（共著・扶桑社）など多数。

## ●戦争協力への懺悔

2001年、妙心寺派として戦争協力懺悔表明である「非戦と平和の宣言文」を全国各地の代表者から構成される宗議会名で、やっと「出すことができました。」

私が花園大学の学長を務めていた1995年、妙心寺の復興に尽力した日峰宗舜（にっぽうそうじゆん）禅師という高僧の55年遠忌（法要）が営まれ、その行事の一環として、記念講演を頼まれ

たことがありました。ちょうど終戦50年の年でしたから、講演では、私なりに戦後50年の総括のようなお話をせざるを得ないという思いでした。実は、終戦になる1945年の4月に日峰宗舜禅師の500年遠忌が行われています。その時、全国の檀信徒会に呼びかけ、資金を募って戦闘機を二機、軍部に贈っているのです。そこで、「命を大切にしなければならぬわれわれが、行事の記念としてのちを奪う道具を軍部に

提供したことは誤りであった、間違ったことをしたという懺悔表明をすべきではないか」という講演をしたのです。

その後、当時の宗議会の議長に手紙を出して「懺悔表明をすべきだ」と言いましたが、なしのつぶて。なんともならなかったのです。それから6年経った2001年のある日、オーストラリアの女性から、禅宗各派の管長や師家（修行道場の指導者＝老師）に質問状が来た

## 宗議会非戦と平和の宣言文

先の米国同時多発テロにより行方不明者を含み五千余名の死傷者を出すという未曾有の惨事を目のあたりにして、テロ行為者に対する強い怒りと犠牲者に対して深い悲しみを表明するものであります。

納等、ここに犠牲となられた方々のご冥福と身心に深い傷を負われた方々の快復の一日も早からんことを願うのみであります。

いかなる事由があろうとも人間の生命の尊厳を無慈悲に踏みこむ行為は許さるべくもなく、被害者（国）の怒りと悲しみは察して余りあるものがあります。しかしながら正義の名のもとに報復することは、自らをおとしめる結果になりかねません。テロというこの人類の卑劣な犯罪と悲劇を終焉させるためには、二十一世紀を共に生きる人間としての道義と釈尊の悟られた叡智を以って、根本的な解決を図らねば、憎悪や恐怖の連鎖を断ち切ることは望むべくもありません。米国は今日のテロをニューウオー（新しいかたちの戦争）と表現し、また、報復の目標とされている国は、これをジハード（聖戦）と称し、受けて立つことを表明しています。この様な状況の中で宗門人として、対話と相互理解を深めることを内外にアピールし、生命の大切さを守り抜く決意をすべきであります。

かえりみずと、かつて我が国も聖戦の名のもとに戦争を遂行し、彼我各国に多大の苦痛と損害を与え、たとえ国策とはいえ結果として、戦時の高揚した国民感情の中で、我が宗門が砥柱のごとく反戦を貫くことが出来ず協力して来たことに誠実に遺憾に思うものであります。まずこの過去の過ちに対する懺悔と反省の上に立って、諸民族の多様な生活や価値感、信条、宗教を尊重しつつ、日々の教化活動において我が禅門の宗旨を宣揚し、世界の平和のために一層努力しなければなりません。また、先般ハンセン病国家賠償訴訟原告勝訴の判決を受けて、政府は控訴を断念し、元患者への賠償金支給や名誉回復を図り、福祉増進等の保障措置を成立させ新しい局面を迎えつつあります。

宗門として今日まで元患者の苦しみと心をついにすることもなく、過去の国策による強制隔離のため誤った認識や偏見によって、その悲惨な生活を看過してきたことを懺悔し、お詫び申し上げるものであります。

いづれにしても悲惨な人生を送り、不条理な死を余儀なくされる人が、この地球上に一人たりとも存在することのないよう釈尊の御心を体して、宗門人一人一人がこれを主体的に受けとめて実践することができるように決意し、宣言する。

2001年（平成13年）9月27日  
臨済宗妙心寺派 第一〇〇次定期宗議会

[http://www.myoshinji.or.jp/about/heiwa\\_back\\_01.html](http://www.myoshinji.or.jp/about/heiwa_back_01.html) (妙心寺派寺院HPより)



手を把って共に行く（河野太通さん筆）

いう要望を師家会議の提案として9月の宗議会に出そうじゃないか」という文章を、全国の師家に回覧し、署名捺印してもらうことにしました。そんなことをしている最中の9月11日、アメリカで同時多発テロがあったんです。「罪のない人たちが命を奪われるなんて、とんでもないことだ」と多くの和尚さんたちも議員たちも言うわけですよ。『テロはけしからんことだけれども、今ごろになってそんなこと言えた義理か』と私なんかは思うわけです。でも、それでも、回覧が宗議会に間に合ったのです。押印してくれなかったのは一人だけ。あとはみんな押印してくれました。

師家会議の提案だけが力になったわけではないですが、とにかく「非戦と平和の宣言文」が宗議会で決議されたのです（資料）。懺悔表明が出たので私もやっと安心しました。宗門としての自浄能力は不十分だと思いました。「同時多発テロがあったことをきっかけに、過去を顧みて戦争協力を謝罪する」ってことになった。平時から常に発信しておくべきではないか。6年前に自ら懺悔表明を出してほしかったのです。それでも、東日本大震災が起きたとき、震災、原発に対して宗門として宣言文や談話を速やかに出しました。宗教者として「命と平和」について発言しなくてはならないという機運が高まっていると思います。

のです。「夫は戦争中ジャワにおり、そこに日本軍が侵攻してきた。夫は強制収容所に入れられて労働に従事させられ、そのせいで精神的、肉体的な病気を今も抱えている。そんな不安な心を鎮めようと、私は座禅会の会員になって座禅を一所懸命やっている。そんなとき、『禅と戦争』光人社、2001年」という本を読み、禅宗の僧侶や組織が戦争を煽っていたことを知った。これはいったいどういふことなのか。これを現在の指導者であるあなた方はどう思うのですか」という内容でした。

早速、私は私なりの返事を出しました。私以外にも戦争協力をしたことは誤りだという返事をなさった方も少数いましたが、これは、宗門として、ぜひちゃんとした返事を出さなければいけないということになりました。その頃、9月に開催される宗議会が迫っていました。私は1995年からずっと懺悔表明を出すことを主張してきましたが、今回はぜひ宗門として懺悔表明を出してほしいと訴えました。毎年、全国各地の修行道場の師家（老師）が一堂に会する師家会議が2月にあります。本来は、師家会議で宣言文を提案するといいたんですけれども、2月を待っていたら遅くなってしまふ。そこで、師家のみなさんの賛同を得るために回覧という方法を考えました。「戦争協力に対する懺悔表明をしてほしいと

## ●「把手共行」に込めた思い

把手共行（資料）という言葉は、私の造語ではないのですが、震災後に時々書いておられます。諸行無常・諸法無我・寂滅為楽、この3つが仏法の根本、世の中の真実です。

二番目の「諸法無我」とは「自分というものは無い、あるのはお世話になった事柄だけ」ということ。互いにかかわりあう、これを仏教では「縁」をいただくというわけですけれども、だれも縁なくして存在することはできません。だれにもお世話になつていないようでも、大自然とかかわりも含めて何らかのかかわりというものがなくては人間は生きていけない。だから、よいかかわりを求め、人様にもよい関係をもっていたら人生がなくなってしまう。独りよがりではなくつながりを大事にして、手を把りあって、ともに歩んでいく。それが人生だし、特に宗教家のつとめだと思っています。

## 取材メモ



質問するときには、一言も口を挟まずにじっと耳を傾けて話を聞いてくれた河野太通さん。質問者を理解しようとする優しいまなざしが印象的でした。相手のことを尊重し、真摯に向き合われる姿と把手共行の言葉が重なりました。

聞き手：土岐邦彦（岐阜支部長）